ほ～おん通信

NO.74 2017 冬号
年四回 不定期発行

発行：鯖江市杉本町 31-42　報恩寺
編集：林　暁　T/F 0778-51-6064
e-mail　satoru@utopia.ocn.ne.jp

おうちのみんなで読んでね

阿弥陀如来の、何ものにも妨げられない光明は、深い迷いの闇を破る真実の智慧です。

新年を迎えると、親鸞聖人が『口伝鈔』に「**日出てまさに夜あくるものなり**」と語られた言葉が思いこされます。太陽の光が差して夜の闇が開ける、大自然の働きが人間の生活を成り立たせています。

この世には太陽の光が届けば消える闇と、人間の無知の闇、公害や戦争など命を粗末にする社会的な闇があります。例えば、絶対悪ともいうべき核兵器を作り廃絶できない現実は、決して他人事で済まされる問題ではなく、人類全体の作り出した最大の闇と言えるでしょう。

昨秋の西本願寺。新ご門主の継職を内外にお披露目する伝灯報告法要が始まる。本年は3-5月に48日間（午後一座）開かれる。

親鸞聖人が、「**無碍の光明は無明の闇を破する慧日なり**」（阿弥陀様の何ものにも妨げられない光明は、人間の長く深い迷いの闇を破る真実の智慧の太陽）と、『教行信証』の冒頭に刻まれたお言葉は、無明を抱えた一人一人の存在が無碍の光明に照らされて生きる道を示されています。無明の闇の底にまで通底して、真実の教え（光明）に遇うことができたら人生は変わるでしょうか。

「命が一番大切になものだと思っていた時は、生きるのがしんどかった。命より大切なものがあると知った時、生きているのが嬉しくなった」という言葉を残された人がありました。

自分を是（よし）とし、他を非（あし）とする心の闇は、我執のゆえに自他共に幸せにはなれません。過剰な自己愛で苦しむ我が姿を気づかせ、打ち破るような真実の光に出遇いたいものです。（孝雄　出典　仏教家庭学校）

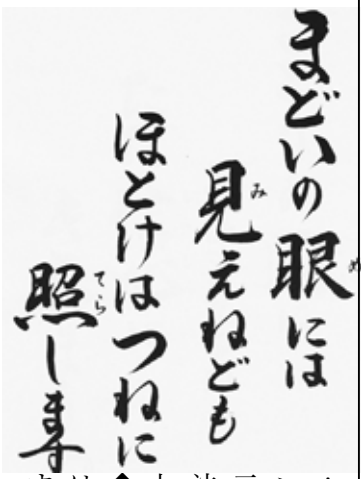
今年度行事予定

- お年頭：1月2日（祝月）終日
- 永代経：3月20日（祝月）昼3時
- 七日盆：8月7日（月）終日
- 盆会：8月15日（火）終日
- 報恩講：9月23日（祝土）昼3時、夜7時

↑どうぞお参りください

親鸞聖人御正忌：1月16日　ご誕生：5月21日
お釈迦様ご命日（涅槃会）：2月15日　ご誕生：4月8日　お悟り：12月8日

法語カレンダー⑨（浄土和讃 第九三首／親鸞聖人）



＊今年の法語（真宗教団連合カレンダー）は、親鸞聖人の三帖和讃三五三首から選出。阿弥陀様のご法義を分かりやすく讃嘆された、七五調の四句からなるうたです。

◆この和讃は続けて「凡地にしてはさとられず　安養にいたりて証すべし」とうたわれます。

まず、如来とは仏の別名であり、真如という悟りに至ったもの、または来られたものという意味で、あるがままの真理（またはその体得者）が、生きとし生けるものを悟りの世界へと救う活動を表しています。次に涅槃とは涅槃寂静とも使われ、煩悩の火が吹き消された静かな境地を指し、自己中心的な欲望から離れてこの世の迷いから解脱する、つまり悟り（正覚）を意味しています。

さらに仏性とは、悟りを得た仏の本性・徳のことで、悟りそのものの性質を意味します。『涅槃経』には「一切衆生悉有仏性」（生きとし生けるものはすべて仏になる本性を有している）という有名な一節がありますが、これは仏様のみが確認できうることであり、現実に煩悩に覆われ苦悩の中にある私たちにはその気配すら感じられません。

後半二句ではそのことを示され、安養浄土に至ってこそ真理の体得が達成できると詠まれます。『阿弥陀経』には、極楽（安養）浄土が麗しく描写されていて、その聖なる異次元の世界から、私たちに宿る仏性という種を必ず開かせ輝かせるぞと、阿弥陀様が万徳を込めて呼びかけておられます。私たちの仏性に働きかけるのが、「南無阿弥陀仏」の呼び声なのです。（引用「心に響くことば」「月々のことば」）

教えて、お坊さん ⑨ 「家で仏事はするけどお寺には殆ど行きません」・・・

本山参拝でわかりやすいガイドのお話

お寺やお坊さんとの付き合い方は、お家やお寺それぞれなので一概には言えない。お坊さんから言えば、月命日や法事などに伺って家族皆で仏事を務めつつ、お寺の法要に参拝して様々な会にも顔を出して欲しいのだが、ご門徒の方からすれば故人の仏事は営みお彼岸やお盆の墓参りはするものの、お寺にはよほどの用事がなければお参りする習慣がない、という方が実際多いのではないか。

かつては在所に御講が開かれ、寺の法要や寄り合いでも飲食・歓談を兼ねて集まった。寂しいことだが、核家族化が進み娯楽も山のようにある今の時代においては、お寺にお参りすることの価値が激変している。様々な趣向や地道な取り組みで頑張っているお寺はあるものの、全体に参拝者も法座自体も右肩下がりの傾向は急速に強まっている。

お坊さんやお寺との付き合いがもし負担になるとしたら、その要因もそれぞれ多岐にわたるだろう。お寺やお坊さんの魅力、熱意、能力や取り組みが、社会全体のお寺離れの流れや過疎化に対抗できるのかどうか、真剣に見直さなければならない。

敷居が高いとか法座が退屈だとか、もし財施だけ要求されては心離れるばかりだ。気持ちが休まり、敬虔にもなり、時には楽しく時には厳しく、そのような信仰の場を一緒に育てていくことが、お寺の大事な使命であることには間違いない。

仏法的、再編集ワーク③
〈地球での出張報告書
～尊厳療法から〉

◆新年を迎えたりすると、昨年の自分を振り返り、今年の目標や願いを立てたり見直したくなります。若い時と年が入った時では人生観も異なると思いますが、仮にもし余命いくばくもないと知った時にはどんな思いにとらわれるでしょうか。

以下は、ターミナルケアの中で試みられる「尊厳療法」という手法の質問項目の一部（E を除く）です（実際は看護師が患者に聞き取り、文書でまとめるとのこと）。

A）あなたの人生において、特にあなたが一番憶えていること、最も大切だと考えていることは、どんなことでしょう？一番生き生きしていたと思うのはいつ頃ですか？

B）（家族、職業上、地域社会で）あなたが人生において果たした役割のうち、最も大切なものは何でしょう？なぜそれはあなたにとって重要なのでしょう。そしてその役割において、あなたは何を成し遂げたのだと思いますか？

C）あなたが愛する人たちに言っておかなくてはと未だに感じていることや、もう一度言っておきたいことがありますか？

D）あなたが人生から学んだことで、他の人たちに伝えておきたいことは、どんなことですか？家族に残しておきたいアドバイスないし導きの言葉は、どんなものでしょう？

E）自分への弔辞を書くとしたらどんな言葉をかけますか？あの世に帰るに当たっての出張レポート、お浄土の入り口での自己申告、といったものをイメージするとしたら？

どのように自分の人生を認めていくか、ということを自分の「ミッション・ステートメント」に書き直すと良いでしょう（会社で言えば社是、社訓）。遠くからの光で照らし出された私の存在意義のようなものです。勿論そんなもの必要なくても、年によって変わっても構いません。人生は多様です。

誰でもあとわずかしか生きられないとわかると、愛が溢れてきてこの瞬間を怒りや愚痴に支配されずに大切にしたいと思うでしょう。大きな目で自分のエンディングから振り返ると、本当に自分がしたいこと（すべきことでなく）が、潜在意識から浮かび上がってくるかもしれません。

（参考：「ライフナビゲーションツール」／津村喬、愛知県がんセンター）

これはオススメ！「この世界の片隅に」こうの史代／双葉社

◆今回、話題の映画を見て初めてこの原作を知った。作家は広島生まれの女性。原作の漫画も映画も、極め付けの傑作である。

主人公のすずはおっとりしてボ～ッとした女子だが熱いものも秘めている。水彩画タッチの絵と、のん（能年玲奈）さんの広島弁がぴったりだが、呉から広島を舞台に戦時下の重たさと絶妙なバランスを見せる。作家や監督は入念な調査と取材を重ね、庶民の日常を実に丁寧に描きつつ、冗長な説明なく印象深いシーンやセリフは数多い。

玉音放送を聞いて、「最後の一人まで戦うんじゃなかったんかね！まだ左手も両足も残ってるのに！」と号泣するのは、過酷な窮乏生活に耐えた庶民の自然な感情ではなかったか。讃仏偈と白骨の御文章も一瞬登場。

姪っ子とともに右手を失い、街が焼けて多くのものが傷ついても主人公をめぐるホームドラマは続いてゆく。名付けようのない感情に翻弄されるような、深く余韻の残る作品だ。

「自分の感受性くらい」

ばさばさに乾いてゆく心を
ひとのせいにはするな
みずから水やりを怠っておいて

気難しくなってきたのを
友人のせいにはするな
しなやかさを失ったのはどちらなのか

苛立つのを
近親のせいにはするな
なにかも下手だったのはわたくし

初心消えかかるのを
暮らしのせいにはするな
そもそもが
ひよわな志にすぎなかった

駄目なことの一切を
時代のせいにはするな
わずかに光る尊厳の放棄

自分の感受性くらい
自分で守れ　ばかものよ

（茨木のり子）

みずみずしい感性が詩人の命。しかし乾いてゆくのは体を持つ万人に共通の課題だ。若い時代の弾力やエネルギーを思い出せば、年齢が行き体が重くなり、生活の中でいつの間にか手垢が付くように感動や希望が失われてしまうことに、愕然としてしまう。

老いて脳の活動が衰えて怖いのは、新しい情報が定着しなくなることより、感覚が鈍くなること。気が回らず身の回りへ配慮が働かなくなることだ。空気が読めない、会話の流れが察知できない。姿勢が崩れ、身だしなみや礼儀作法、後始末などに構わなくなる。思い込みや勘違いが多くなり、変化する物事に対して自分のキャパ、理解力が追いつかなくなってしまう。投げやりになり人のせいにして自分を守る。

往生礼讃偈に「力のあるうちに求めよ」という一節があるが、目鼻耳足腰が病まずとも、自らの性分や価値観を硬直せぬよう律していくのはかなり困難。自分の経験が、傲慢さや懐の狭さに輪をかける。そこに目覚めさせようと、仏が活動している。

実践！ 肩の荷がおりる気功 ❸～腕のストン

す～っと腕がつり上げられ、糸が切れるようにストンと自然に落ち、その重さでぶらぶら揺れます。ふっと膝が緩み、足腰が柔らかく少し伸び縮みします。力を抜いて2-3分、自分のペースで気持ちよく。by NPO法人気功協会

本年もどうぞ宜しくお願い致します。

▼昨年、お同行の皆様にはそれぞれお世話になりありがとうございました。得度して半年の妻と山田氏は、まだまだ出番は少ないですが、共々地道にお聴聞と研鑽に努めたく思います。（S）

▼映画「この世界の片隅に」を観てきました。戦争中の日常、普通の暮らしが丁寧に描かれており、とても心が揺さぶられました。上映が拡大延長されているとのこと、是非オススメの映画です。二〇一七年もいろんなことに感動したいです。どうぞよろしくお願いいたします。（C）